小山工業高等専門学校研究紀要
第 36 号 (2004) 19－24

英語の二重否定について

－ I can't get no satisfaction －

Some Notes on English Double Negative

長谷川 誠

HASEGAWA Makoto

0. はじめに

「英語の二重否定は強い肯定を表す。」筆者はこれまでに何度となくこのような説明に接したことがある。「そのことを知らない人はいない」のような文では、「すべての人が知っている」という意味になるから、確かに「・・・ない・・・ない」は強い肯定を表す、という説明は納得できるものである。しかしながら、同じ「・・・ない・・・ない」の形を持つ表現すべてに当てはまるかというとそうではない。「・・・ない・・・ない」が強い肯定を表すのならば、「そのことを知らない訳ではない」のような文では、「そのことはすべて知っている」という意味を表すことになりそうだが、そうではない。今度は、「二重否定は控えめな肯定を表す」という説明になる。この２つの説明がどのような場合に適用されるか、ということには触れず、ただ事実として併置されるだけの記述となっている。

英語の二重否定に２つの用法、つまり、「強い肯定」を表す場合と「控えめな肯定」を表す場合があることは示されていても、それに対する説明というのはこれまでほとんどなされていない。英語の二重否定の説明は、もっぱら非標準とされる形式についてのものばかりで、その意味解釈の説明は「否定の否定は肯定である」ということに止まり、あとは、「強い肯定」を表す場合と「控えめな肯定」を表す場合の具体例を挙げるだけである。どうしてそれが「強い肯定」を表すのか、あるいは、「控えめな肯定」を表すのか、ということには触れられない。あるいは説明はあっても、人間の自然な心理であるというような説明では、やはりその違いが説明されているとは言い難い。

本稿では、英語の二重否定について、これまでの説の中の問題点を明らかにし、その解決法を探ることとする。

1. 二重否定とは

英語の文法において否定は重要な文法事項である。それにもかかわらず、「二重否定」については、あまり詳しく説明した辞書・文法書は見あたらない。「二重の否定」という言語現象は、英語に限られる現象ではなく、日本語も含めて、多くの言語でもみられる。「二重否定とは否定の否定で肯定」となるから、言語一般についての知識があれば特定の言語についての説明がなくても誰にでも理解できる現象かというと、そうでもない。英語には英語に特有の現象があっても不思議ではない。英語に特有の問題があることは、たとえば、インターネット上の Online Opinion Polls on the English Language で行われてい

る、「二重否定は肯定を表すかそれとも否定を表すか」についての世論「二重否定」調査で結果が常にほぼ半々になることからも見て取れる。論理学的に考えれば、「否定の否定は肯定である」となるので、意見が分かれることなどは考えにくいが、このような結果が生じるところにも英語の「二重否定」の複雑さの一端が現れている。もちろん「二重の否定」には、多くの言語に共通する部分があると仮定してもおかしくはなく、最初から、言語は文化の違いを背景にしているのだという理由で、それぞれの言語の「二重否定」はそれぞれ別の現象であると考えなくてはならないと考える必要はない。

辞書・文法書で、「二重否定」が項目として取り上げられいるような場合でも、「同じ文の中に２つ否定の言葉がある文は容認できない」*(注１)* という説明や「否定の否定は肯定である」*(注2,3)* という説明があるだけで、その後は、いくつかの例文を参考にして読者が自分で要領を掴まなくてはならない場合が多い。さらに問題となるのは、説明や例文が、一見相反するような記述となっていることが多い、ということである。「二重否定」について、ある所には「控えめな肯定を表す」、との記述があるかと思うと、また別の所では「控えめな表現を使うことによって強い肯定を表す」、と記述されているという具合である。説明がなされる場合でも、そのような表現の歴史とそのような表現を使う人間の心理という観点からなされていることが多く、必ずしも納得のいくようなものとはなっていない。

英語に関しては、「二重否定」の捉え方が人によって異なることが、「二重否定」についての記述から浮かび上がってくる。その１つは、not および no、そして nothing、nobody、nowhere など no を含む語が同一の文に現れる場合を「二重否定」として扱う、いわば形式を重視する捉え方といえるものである。２つ目は、not が否定の意味を持つ語を修飾している場合も、否定の意味を持つ語を否定しているのであるから、これも含めて「二重否定」として扱うものである。さらにまた、deny のような「否定する」という意味を含む動詞の後に not が現れるような文も、not のある否定の文を「否定する」という意味を含む動詞で否定するのであるから、「二重否定」に含めて扱うものもいる。deny のような動詞＋ not の場合は、It is silly to deny that I would not have minded a crack at it.　I would not deny that it was not a particularly good way to deal with the situation. のように、論理的に扱えるので、意味解釈上特に問題とはならない。

本稿では not および no、そして nothing、nobody、nowhere など no を含む語が同一の文に現れる場合および not が否定の意味を持つ語を修飾している場合を「二重否定」とする。

2. 二重否定の分類といくつかの問題点

二重否定を考えるためには、二重否定という語がどういう意味で使われているのかを検討することから始める必要がある。not および no、そして nothing、nobody、nowhere など no を含む語が同一の文に現れる場合をまず検討してみる。Collins Cobuild English Grammar では、It is almost always unacceptable to use two negatives in the same sentence. と述べている。これは、単に形式についての記述に見えるが、実際は、そうではない。Cassel's Students' English Grammar には、 I cannot give you nothing という文は、 I must give you something.　It would be unfair not to give you a present. という意味であると説明されている。つまり、Collins Cobuild English Grammar の記述は、I can't get any satisfaction. と言うつもりで I can't get no satisfaction. と言うのは容認できない、というふうに解釈すべきである。つまり、ここでの記述は、意図した意味とそれを表す言語形式のずれが広く見られることへの警鐘で、言語形式そのものの正しさではない。

次に、not が否定の意味を持つ語を修飾している場合を考えてみよう。今度は、not unhappy や not a few、not without などが新たに付け加わることになる。a few のような語も、その意味を日本語にすると「少しし

かない」というように、「ない」という概念を含んでおり、これは英語の場合にも当てはまることなのでここに含めて扱われる。この形式では、正反対の説明が見られる。ジーニアス英和辞典では、「He was not unhappy. 彼は不幸ではなかった。I rejected her offer and not without reason. 彼女の申し出を拒否したが、理由がないわけではなかった。This is a not (not an) unreasonable interpretation. これはまんざら不合理な解釈というわけではない。」のような例を、「遠回し的な肯定」に用いた例としてあげている。しかし、Longman Dictionary of Contemporary English では、a not unwelcome guest = a very welcome one、 drank not a little of the good wine = drank a lot of the good wine のような表現は気取った言い方で、un で始まる語や small、slow、etc. の意味を持つ否定の語と共に使って、「反対の意味を強める」、としている。これと同様なことは、not + no の場合にも起こりうる。There is nothing he doesn't know. = He knows everything. であるが、それならば、This is not unknown to us. は This is fully known to us. となるはずだが、実際には、This is known to us to some extent. である。*(注4)*

これはどのように考えたらよいのだろうか。これまでは、基本は「遠回し的な控えめな肯定」で、控えめに言うことで時には強い意味になる、というような説明が与えられている。そして、この現象は全ての言語に共通であるかのような説明がなされてきている。たとえば、「少なくない」は「多い」という意味で使われ、「うすら馬鹿」は「大馬鹿」の意味で使われる、というような説明がなされる。*(注4)* それでは、not a few は、どうして「少なくはない」ではなく、「少なくない」の意味になるのであろうか。また、「うすら馬鹿」が「大馬鹿」の意味だとするならば、「うすら寒い」は「すごく寒い」の意味になるのであろうか。ここでの説明は、結論が先にあって、それに合うような例を後から付け加えたという印象がぬぐえない。

3. 二重否定の意味解釈

上で見たように、現在広く見られる「二重否定」の説明は説得力に欠けるようである。そこで、「二重否定」の意味解釈について新たな説明を試みたい。

まず、よく知られているように、not には、文否定と語否定という２つの働きがある。文否定というのは、否定が文全体に及んで、「主語＋述語」の結びつきを否定するもので、それに対して語否定は、not が特定の語・句・節のみを否定するものである。

文否定の場合は、I'm not unhappy. は I'm unhappy. の否定であるから、「私は不幸ではない」という意味になる。これは、遠回し的な控えめな肯定となる。では、この「遠回し的な控えめな肯定」とはどういうことであろうか。A Comprehensive Grammar of the English Language は、The double negative phrases require a gradable adjective or adverb as head, the negation indicating a point between the extreams of the gradable scale. とだけしか説明していない。これでは、I'm not happy. と I'm not unhappy. はどちらも indicating a point between the extreams of the gradable scale ということになり、I'm not happy. と I'm not unhappy. は、同じ意味ということになる。たとえば、気の毒な状況にある人が、励ましそうとする人に Are you all right? と聞かれて、I'm not unhappy. と答えたとする。この場合の答えを、同じ意味を伝えようと言う意図で I'm not happy. と言うことはできない。この意味の違いはどこから生じるのだろうか。

unhappy というのは、marked な表現 *(注5)* である。広く一般的な状況では、unmarked な表現を用いる。たとえば、単純に２人の背の高さを比較するときは、「背が高い」という意味の tall が unmarked な表現であるから、通常は A is taller than B. と言う。これと論理的には同じ内容を表すからといって、B is shorter than A. とは普通言わない。このような表現を用いるのは、B が話題の中心となっている文脈であるか、あるいは、誰か背の低い人を探しているか、何かしら特別な事情があるという前提がある場合で

ある。happy は「gradable adjective」であり、I'm not happy. = I'm unhappy とはならないので、アンケートなどでおなじみであるが、happy と unhappy の間に、少し happy、どちらとも言えない、少し unhappy という３つの領域を想定するのは自然なことである。その物差しで考えてみよう。unhappy を使う場合の前提は、話者が対象を not happy at all だと考えている、ということではないだろうか。通常、I'm not happy. の場合は、次に続く言葉を予想しても、せいぜい happy さの度合いを表す言葉だろうという程度で、それ以上の予想は立てられない。それに対して、I'm not unhappy. の場合は、全く happy ではないという前提があるため、I'm not unhappy. と言われたら、I'm not happy at all. であり、しかも I'm not unhappy. であるような領域を指す言葉が続くということが当然予想される。そうだとすると I'm not happy. と I'm not unhappy. の違いは、次の図で示すことができる。〰〰〰がその味する領域とする。

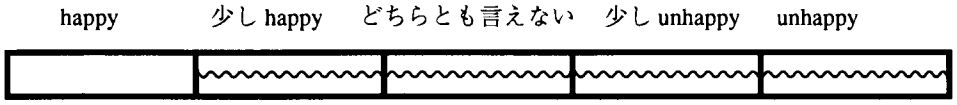

図１　I'm not happy.

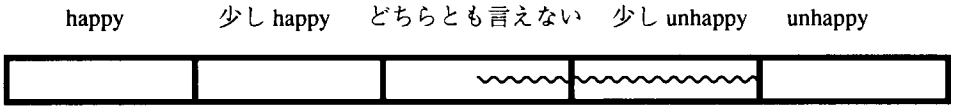

図２　I'm not unhappy.

これが、「遠回し的な控えめな肯定」と言う意味解釈を生じさせると考えられる。

では、語否定の場合はどうだろうか。a not unwelcome guest = a very welcome one、 drank not a little of the good wine = drank a lot of the good wine のように、「un で始まる語や small、slow、etc. の意味を持つ否定の語と共に使って、反対の意味を強める」、というのが語否定の働きである。この説明を少し細かく見てみることにしよう。un で始まる語や small、slow、etc. の意味を持つ否定の語というのはどのような語のことであろうか。un で始まる語というのは、否定の意味の接頭辞 un を持つ語ということで、問題はない。では、「small、slow、etc. の意味を持つ否定の語」というのはどのような語のことであろうか。small という語は、「大きさ」を表す語であるが、一般的に大きさを言うときには large が unmarked な言い方であ、small は marked な言い方となる。slow という語も、同様に、「速さ」についての unmarked な言い方 fast に対する marked な言い方である。こう考えると、un で始まる語や small、slow、etc. の意味を持つ否定の語というのは、marked な語と言い換えることができる。

次に、not の使い方についてもう一度考えてみよう。Collins Cobuild English Grammar は 'Not' can be used to contrast one part of a clause with another. Using 'not' in this way emphasizes the positive part of a statement. Sometimes you want to draw attention to a clause or word group by contrasting it to something different. One way to do this is to link two elements by putting 'but' between them. You put 'not' in front of the first element. と説明している。つまり、not は、ただ単に not の修飾する部分を否定するだけでなく、not で否定される部分と対比される肯定の部分を強調するという働きも持っているということである。そして、この働きが顕著に現れるのが、「not ～ but ～」という相関語句の場合である。

上で見た２つの事実を合わせて考えると、どうなるだろうか。つまり、語否定の not が marked な語にか

かるとどのようなことが起こるだろうか。unmarked な語の否定の場合には、特に前提ということはないのでその後で強調される意味がどのようになるかは予想できない。それに対して、marked な語というのは、大きさ、速さ、長さ、幸福度などを測る物差しで、マイナスの領域にあるということを表している。そこで、そのマイナスの領域にある語を not で否定すると、unmarked な意味が来ることが当然予想されることになる。こうして生まれる対比による強調が語否定の not の役割であると考えることによって、これまで、控えめな言い方をすることによって反対の意味が逆に強調される、と説明されてきた「二重否定」の意味を、否定語 not の持つ働きの当然の結果と考えることが可能になる。たとえば、unwelcome という語は、迎え入れる喜びに関して、そのマイナスの度合いが大きいという意味を持つ。そこで、not unwelcome と言えば、not unwelcome (but very welcome)という解釈がなされる。また、a little は量に関して、それが少ない、というマイナスの度合いが大きいという意味を持つ語で、その対局の意味は、a lot である。そこで、not a little と言えば、not a little (but a lot)という解釈がなされる。同様に、not a few と言えば not a few (but very many)、not small と言えば not small (but very large)、not slow と言えば not slow (but very fast)と解釈される。これに対して、unmarked な語の場合には、それと対比される意味が自動的には決まらない。たとえば、She is not kind but curious. のように、度合いだけでなくその評価の物差しそのものを変更することも無理なく行えるため、not kind と聞いても not kind (but very unkind)と言う解釈には結びつきにくい、と考えられる。 英語では、文否定と語否定は排他的ではなく、文否定とも語否定ともどちらにも解釈できる場合が存在する。その場合の「二重否定」の解釈も２通りになる。

「二重否定」という現象は、英語だけに限らず、多くの言語でも見られる現象であるが、それでは、このような解釈は、他の言語にも当てはまるものだろうか。英語の場合に、語否定の not が marked な語と共に使われると、反対の意味が強調されることになる一因は、「not ～ but ～」という相関語句の持つ対比による意味の強調という用法の発達にあると考えられる。この用法が広く定着していることが、上で見た例のような解釈を可能にしている。not と marked な語の連鎖を見聞きすると、自動的に（　　）の中の意味に解釈できる。それに対して、日本語の場合を考えてみると、「～ではなく～な」という表現は、「～ではなく」と言うだけで、その後に続く「～な」を省略してもその意味を表せるようには発達していない。そこで、a not unwelcome guest を「歓迎されなくはないお客」としては、英語の表現と同等な表現とはならない。日本語で近い意味を伝えるならば、「歓迎されないどころか大歓迎のお客」とでもすべきところである。

以上の考察をまとめると、英語の「二重否定」の意味解釈は、not の文否定と語否定という２つの用法と marked な語の使用の相乗効果によって生じるものであり、そこには「not ～ but ～」という相関語句の持つ対比による意味の強調という用法の発達が大いに関わっている、と言える。

おわりに

これまでの英語の「二重否定」の意味の説明は、「控えめな肯定を表す」場合と、「強い肯定を表す」場合があるというだけで、それがどうしてそのような解釈になるのか、ということについての説明はなされてこなかった。marked と「not ～ but ～」の相関語句に注目することによって、これを、文否定と語否定という、英文法上の２つの否定の方法で説明することが可能になる。こうすれば、「二重否定」について、相反するような説明をする必要が無くなる。

注

1 「英文法総覧」　安井　稔　開拓社　昭和 57 年

2 *Collins Cobuild English Grammar*　(1990)　William Collins Sons & Co Ltd, London

3 「英文法解説－改訂 3 版－」　江川泰一郎　金子書房　1991 年

4 「詳解　英文法辞典」 井上義昌　開拓社　昭和 41 年

5 *The Functional Analysis of English*　(1995) Thomas Bloor and Meriel Bloor, Arnold London

p82　markedness

Markedness is a concept which is useful in language study as a whole, not only with respect to issues that are discussed in this chapter. Markedness, in the sense in which we use the term here, concerns the probability of a grammatical occurrence in the language as a whole rather than in any particular use of the language in context....marked (the unusual form) or unmarked (the usual form) ...

参考書目

Allsop, Jake. (1983) *Cassell's Students' English Grammar,* Cassell London

Collins Cobuild English Grammar　(1990)　William Collins Sons & Co Ltd, London

Longman Dictionary of Contemporary English　(1978)　Longman

Quirk, Randolph et al. (1985) *A Comprehensive Grammar of the English Language,* London

Thomas Bloor and Meriel Bloor. (1995) *The Functional Analysis of English,* Arnold

井上義昌 昭和 41 年 「詳解　英文法辞典」　開拓社

江川泰一郎　1991 年 「英文法解説－改訂 3 版－」　金子書房

安井　稔　昭和 57 年 「英文法総覧」 開拓社

「受理年月日　2003 年 9 月 30 日」